

三 苦しむも楽しむも

西洋のお伽噺に、多年書齋の中から出たことのない哲學先生。或人に勧められて久しか振りに、春日郊外散歩と出かけた。見れば、天地はまるで書齋の中と違つて居る。四方の山々は緑に榮えて、麥は穰々と延び、雲雀は空中に天樂を奏し、犬は堤上の蒲公英の花に狂ひ、こゝ一幅の絶好活動の中に、耕作して居る農夫を見て、先生は羨ましくて堪まらない。「貴方は幸福な人です仕合者です」と譽ると、農夫は「失敬な私は貧乏で商賣するにも資本なく知識なく、仕方なしの土いぢり、それも斯うして働かねば食へぬからだ、年が年中緩々思つた事はない」とやり出したので、先生閉口して、其處を通り過ぎた。

すると一人の四十前後の男が、破れたシャツに崩れた靴を履き、汗を流して棒で玉を頻りに打つて居るので、先生「これはお氣の毒、そんな破れたシャツを着た装りで、左様まで働いて居なければ、妻子が養つて行かれぬとお氣の毒である」といふと、大將「失敬な僕は三度の食事は廢しても、此運動は好きだ、晝の中は皆百姓で忙しいから、相手がないので獨り稽古をして居るのである、こんな楽しい事はない」と云つた。

それから先生は町へ出て電車に乗る。電車の運轉臺に居る運轉手が、リン／＼と鈴を鳴らすと、貴人も貴婦人も雲の如く集まつた人々も兩側に別れ、其の中を勢いよく車で走らすのを見て、先生思へらく「この快男子、生れて須らく運轉手たるべし、實に此仕事は爽快な仕合者だ」といふ。運轉手は「失敬な、僕は家貧にして教育も受けず、會社にも銀行にも雇つて呉れぬ故止むなく運轉手になつたのである。斯うして鈴を鳴らしても、驥の老人がヒョロ／＼と出て來たり、子供が走り出したりして、一寸の暇も安心が出来ぬ

骨の折れた仕事だ」といふ。

暫くすると次の停留所から、五十格好の男が帽子から洋服にまで、塵を一杯に被つて飛込んだ。「イヤ貴方は何をして来た」。「實は此頃自動車を買って、今郊外を走り廻つて来たのであるが、未だ慣れぬゆゑ、町中では走れもせぬから、御者に持たせて歸した處だ」といふ。先生はさつき運轉手に懲りたので「それはお氣の毒、貴方の年をとつて、そのやうに頭から塵を被つて、自動車で驅歩かねば、妻子が養へぬとは氣の毒」といふと。紳士は「失敬な、自動車は金のかゝる贅澤な乗物で、こんな爽快なものはない」と云つたので、哲學先生大弱り。

同じ破れシャツを着て汗を流しても、趣味を知らぬ百姓は苦みとし、運動家は樂みとする。同じ運動をしても、運轉手は電車で苦しみ、紳士は自動車で樂む。思へ、趣味は力であることを。共同の生活は自他共助の生活である。互に助けつ助けられつ、持ちつ持たれつして行くのである。この事の上に趣味を感じるは、大なる力であり且つ力を得るので、生活の上に一層の活氣を呈し色彩を施し來るのである。此の趣味は宗教の信念から來ます。